

室には、アルチンボルデイに関する文献はほとんど見当たらない。教師たちは、その人物について聞いたことすらなかった。教師の一人が、名前には聞き覚えがあるとベルチエに言った。十分もすると、その教師が名前を覚えていたと思った人物はイタリアの画家だったことが判明し、ベルチエは怒り（驚き）を覚えたが、彼にしたところで、同じくその画家のことを知っているわけではまったくなかった。

彼はハンブルクにある『ダルソンヴァル』の出版社へ手紙を書き送ってみたが、なしのつぶてだった。パリで見つけた数少ないドイツ系書店を片端から訪ねて回ってもみた。アルチンボルデイの名前は、あるドイツ文学事典と、冗談なのか真面目なのかは分からずじまいだったが、プロイセン文学の専門誌であるベルギーのある雑誌に載っていた。一九八一年、彼は大学の友人三人と一緒にバイエルン地方を旅行したとき、ミュンヘンのフォアアルム通りにある小さな書店で、別の二冊の本に出会った。一冊は『ミッツィの宝』というタイトルの百ページ足らずの薄い本で、もう一冊は、先に挙げたイギリスが舞台の『庭園』だった。

この新たな二冊を読んだことで、彼がアルチンボルデイについてすでに抱いていた考えはもはや確固たるものとなった。一九八三年、二十二歳の彼は『ダルソンヴァル』の翻訳作業に取りかかった。誰に頼まれたわけでもなかった。そのころフランスには、この奇妙な名前のドイツ人作家の本を出すことに興味

ジャンククロード・ベルチエが初めてベンノ・フォン・アルチンボルデイを読んだのは、一九八〇年のクリスマスマスのことだった。当時、彼は十九歳で、パリの大学でドイツ文学を学んでいた。件の本とは『ダルソンヴァル』である。若きベルチエはそのとき、その小説が三部作（イギリスを舞台にした『庭園』、ポーランドを舞台にした『革の仮面』、そして見るからにフランスを舞台にした『ダルソンヴァル』から成る）の一つであることを知らなかった。だが、彼の無知、空白もしくは書誌的な怠慢は単に彼が若すぎたせいであり、その小説が彼にもたらした眩惑と感嘆は少しも損なわれはしなかった。

その日から（あるいはその本を初めて読み終えた夜更けから）、彼はアルチンボルデイの熱狂的なファンとなり、この作家のさらなる作品を求めて遍歴を開始した。それは容易な作業ではなかった。一九八〇年代にベンノ・フォン・アルチンボルデイの本を手に入れることは、パリにおいてさえ数々の困難を伴わないわけにはいかない仕事だった。彼の大学の独文科図書